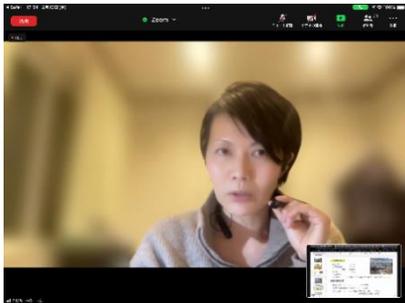


開催地名：埼玉県深谷市	
開催日時	令和4年2月16日（水） 17:30～19:00
開催場所	リモート開催
語り部	上野未生 （岩手県大槌町）
参加者	市職員 200人
開催経緯	<ul style="list-style-type: none"> ・職員の災害に対する危機意識を啓発する機会が少ない ・避難所運営等の災害対応を経験している職員が少ない
内容	<p>(1) 東日本大震災時の記憶</p> <p>東日本大震災の被災直後、盛岡や花巻市など岩手県の中心都市である内陸部と、沿岸部の被害が深刻である地域との距離が大きく開いていたことで、都市間での連絡がつかなくなってしまった。盛岡にある県庁以外にも振興局として横並びに県の機関が3つあるが、被災で県内の連携が取れなくなったことにより、岩手県では初動が大きく遅れることとなった。</p> <p>大槌町は役場にいれば地震でも安全であるという認識があった。しかしながら今回の災害は予想を遥かに超えた被害を出し、結果的に役場も壊滅的な状態となった。役場が機能不全に陥ったことにより、市民らは自分たちでの安全の確保が必要となっていた。このことが大槌町近辺での被害が大きくなった被害の一因であると思われる。</p> <p>(2) 災害時のマニュアル</p> <p>災害時の対応マニュアルで、高台で災害対策本部をたてることが記載されていた。しかし基準があいまいだったため、現場での判断が難しい状況にあった。上からの指示を待っていたが、指示はなく、何が正しい情報かも判断できなかった。津波が来ると思っているのに自身の避難を考える方も3割程度しかおらず、幹部に確認をしても職員避難の指示が出なかった。この経験からいつまで待機をするか、また待機をしても指示がない場合はどうするかの一歩踏み込んだ記述が必要だと強く感じている。</p> <p>(3) 避難における男女差</p> <p>地震が起きたときに男女別の行動の差異を調べると、女性の方が避難の準備をし、家族や知人の安全を確認し避難している傾向がある。女性は家族や近所の人から情報を収集し、男性は消防の車や人から公的な機関から情報を取るという差異もあった。避難のきっかけ自体も、家族または近所の人から「避難しよう」と言ったから、もしくは「避難していたから」という</p>

	<p>言葉が女性は圧倒的に多い。対して男性は1人で避難した方が3割、女性は一緒に声掛けをして逃げたので集団で助かっているか被災しているケースが多かった。</p> <p>(4) その後の地域防災活動</p> <p>町民の方の命も自分の命も守るのが公務員の方の仕事だと、公務員の方々には考えて欲しい。自分たちの安全も確保するためにはというのも逆算して、そのために市民にどのタイミングで、どういう行動を促さなきゃいけないのかを考えていただきたい。生き延びる最善の方法を取ることを役目として、町民の命も自身の命を守るというマニュアルを作成することが必要である。</p> <p>警報が出たときに逃げるということを心がける、逃げるという知識から行動に移すためには覚悟が必要である。平時よりも冷静ではなくなるので、事前に大切な人とのコミュニケーションを取っておき、避難のための確認をしておくことが必要である。</p> <p>また避難のときは一番自転車がとても有効であった。自転車の配分するのにも若手の役場職員が決断できず、配布がすぐできなかった。トップダウンの体制にもメリットはあるが、発災時には自らの考えで決断できるように育成することも、必要なことであることを覚えていてほしい。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div>
開催地より	<p>貴重なお話をお伺いすることができ、これからの業務に活用していきたいと思った。災害時において行政、民間企業・団体、市民など、それぞれは何を行うべきか、何を行わないべきかを、過去の災害経験をもとに講演していただきたい。</p>